

## 聖ペトロ聖パウロ使徒 (マタイ 16:13-19)

教会の柱がいる限り、教会は倒れない



最近、大工さんが家を建てるのを子どもたちはあまり見ないようですね。木曜日の教会学校で「みんなが住む家は、壁があって、屋根があれば立派な家ですか？」と聞いてみたのです。前もって言うておきますが、「柱が必要です」という答えを引き出したかった。

すると、辛抱して待って出た答えが、「窓が必要です」という答えでした。「まあ、窓も必要だね」と相づちを打ちますと、「玄関も必要です」という返事も飛び出しましたが、「まあ、窓も必要だね」という私の言い方で「あ、何か違うことを引き出したいのだな」というニュアンスは伝わりませんでした。「地震や、猛烈な雨や台風でも倒れないためには、壁と屋根だけで大丈夫ね？」と促しても、ついに「柱」という答えは返ってきませんでした。家が建ち上がる様子を、身近で見なくなったんだなあとおつくづく思ったのです。

イエスはペトロの信仰を受け入れて、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」(16・18)と仰いました。日本建築では、基礎の石と、柱があって、建物は建ちます。ですからペトロは東西南北の基礎の石であって、またその上に置かれる柱でもあるわけです。それはペトロだけでなく、最初に選ばれた使徒たち、そしてご自分を、「月足らずで生まれたようなわたし」(1コリント 15・8)と言い表したパウロも、イエスが建ててくださった教会の基礎の石、また重要な柱なのです。

ペトロとパウロが、教会の柱となってくくださったことで、教会は今の今まで倒れることはありませんでした。強風に晒され、焼け落ちたり、崩壊の危機に立たされたことはあったかもしれませんが、しかしどんな逆境でも、教会は本来の姿を取り戻していきました。

私は今でも思い出しますが、上五島の江袋教会は、火事でほぼ焼け落ちました。しかし正確な図面が残っていて、柱が残っていたので、立派に修復されました。当時私は教区広報の委員長だったので、火事のすぐあと教会を訪ねに行きました。小雨の降る日で、全体にブルーシートが被せられていました。焦げ臭い匂いがまだ残ってはいたけれども、主要な柱は残っていて、ここからもう一度教会が修復されるのだなと確信を持ったのでした。

完成後も取材に行き、見事に修復された教会の中に、焼け焦げた柱が補強されたのちにそのまま使われている場所を見て、「柱があれば、家は元通りに戻るのだ」と驚いたものでした。もちろん厳密にはそう簡単ではないのですが、柱があることの重要性を肌で感じた出来事でした。

イエス様は使徒たちを教会の柱としてお建てになりました。使徒たちだけでなく、聖母マリアも女性を代表して、教会の柱だと考えています。ここからが私の本題ですが、私たちの中にはたくさんペトロの霊名パウロの霊名、マリアの霊名をいただいた人がいると思います。一度で

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

良いので、「私の霊名はペトロだから、一度は教会の柱になるような働きをしてみよう」「私はパウロだから、教会の柱になるような働きをしよう」こういう望みを持ってほしいのです。

今日は聖ペトロ聖パウロ使徒ですが、教会の聖人たちは立派に教会の柱、支えとしての働きをした方々です。私たちがそうした人たちの霊名をいただいているのですから、教会の柱となるような働きを一度は引き受けたいものです。ちなみに私は、長崎教区で七人選ばれた地区長の一人であり、長崎教区の柱の働きと責任を感じて過ごしております。

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」(16・19) 私たちの教会は、姿は少しずつ変わるかもしれませんが、どれくらい続くでしょうか。具体的にこの教会は、どのくらい続くでしょうか。最終的には神様だけがご存じですが、柱となる人が続いてくれる限り、「陰府の力もこれに対抗できない」(16・18) のです。

年間第 14 主日(ルカ 10:1-12,17-20)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。